

---

## 学生の視覚障害者の歩行に関するイメージ —アンケート調査から—

日本ライトハウス

本徳香津子

---

### I. はじめに—調査の概要—

#### 1. 調査のねらいと目的

視覚障害者が単独で歩行することを考えた時、当然視覚障害者自身が、適切な歩行訓練を受けて自らの歩行能力を向上させることができると考えられるであろう。しかし、どんなに視覚障害者自身が歩行能力を向上させるために訓練しても限界がある。歩行の限界をつくり出している一因に、視覚を除く他の保有感覚を用いても認知することが困難な交通事情や道路環境などの物理的な歩行環境が考えられる。しかし、視覚障害者の単独歩行とは「完全な独立歩行ではなく、必要に応じて一般社会の援助が依頼できる歩行を指している。」と考えられている（芝田、1992）。したがって歩行訓練では、視覚障害者が道に迷ったり不案内の時など一般社会の援助が依頼できる能力を身につけることも大きな柱の一つにあげられている。

だが、ここでまたひとつの限界が考えられる。どんなに視覚障害者が援助依頼の方法を身につけたとしても、援助してくれる人がいなければ何もはじまらないという人的歩行環境の問題である。これらのことから視覚障害者の単独歩行を考えた時、視覚障害者自身の能力の向上と同時に視覚障害者の歩行をとりまく物理的歩行環境や人的歩行環境といった社会側からの問題がクローズアップされてくる。

さて、1981年の国際障害者年を契機に障害者に対する理解は深まっているといわれている。では、視覚障害者にとって今の社会は歩行しやすい環境なので

あろうか。確かに、先に指摘した物理的な歩行環境を考えた場合、例えば視覚障害者用誘導タイル（以下点字ブロックと記す）は駅や道路や公共施設などでよく見受けられるようになってきている。しかし、一般の人々の視覚障害者が歩行するということに対する理解はどうであろうか。視覚障害者が街を歩けば次々に声がかかり、援助を依頼する相手にことかかないというのが理想であるとすれば、人的歩行環境は10年前と今日で変わったのであろうか。また、視覚障害者自身に対する一般の人々の誤った認識はないのだろうか。

視覚障害者の歩行に対する理解が一般社会に浸透しないうちに、物理的な歩行環境の整備のみが進められていった場合はどうであろうか。歩行環境の整備のみで視覚障害者が安全に歩けると一般の人々が誤った認識をしてしまうのではないかとも考えられる。もし、そのような誤った考えが社会に浸透してしまったら、視覚障害者が援助依頼をする時に非常にマイナスになることはいうまでもない。また、正しく理解されないままに整備される物理的歩行環境が、本当の意味で視覚障害者にとって歩きやすいものであるかは当然の疑問として残る。

これらの考え方をもとに、視覚障害者をとりまく一般の人々のイメージや理解がどのようなものであるかを知ることにより、現在の視覚障害者の歩行環境を知るうえでの一助になればと考え、今回の調査を計画した。質問票では、まず一般の人々がどれくらい視覚障害者と日常の生活の中で接しているかを質問した。

次に一般の人々が視覚障害者を持つ社会的距离、能力に対するイメージ、人格に対するイメージを質問した。この視覚障害者に対するイメージは人により千差万別であると思われるが、その中にも一定の方向性が認められる可能性がある。この一定の方向性が客観的に見て正しいものであるか、誤解されたものであるかが明らかになれば、視覚障害者の歩行に対する正しい理解を求める上での一助になるのではないかと考えた。

さらに、今までの質問をふまえて本題である視覚障害者の歩行に関するイメージと物理的環境の知名度、理解度、視覚障害者の援助ニーズに対する理解度を質問し、具体的に視覚障害者を見かけたら援助するかを質問した。これは今日の視覚障害者の歩行をとりまく人的環境を明らかにするものである。最後に、一般の人々の歩行環境に対する考え方と、視覚障害者に対する興味を質問した。これらの質問を分析することで、今後の課題を明らかにしていきたいと思う。

## 2. 調査の対象と方法

本調査の対象は、関西学院大学の一般教養心理学の受講者および、大阪府立大学の障害者問題論の受講者である。筆者がアンケートの会場に立ち会わなかつたために、回収率は不明であるが、回収件数は310件、無効回答は0件、よつて310件が有効サンプル数になった。

調査方法は各講義の授業中にアンケート用紙を配り、その場で回収した。質問票は巻末にあげるとおりである。調査日は、関西学院大学ではH5年6月30日、大阪府立大学ではH5年7月20日である。回答者は18才から24才、性別は男196名、女112名、所属学部は商学部、経済学部、工学部、農学部、総合科学部、社会福祉学部などで、文系理系を問わず多岐にわたって調査することができた。

## II. 調査結果と考察

### 1. 視覚障害者との接触の度合い

図1は視覚障害者をどの程度知っているかを表している。69.4%の人は視覚障害者を見かけたことはあるが、話したことではないという傍観的な接觸にとどまっている。しかし、友人、知人に視覚障害者がいたり、2～3度話したことがあるという積極的な接觸を持つ人があわせて20%いる。これは他に比較するデーターがないが、比較的高い数字なのではないかと思われる。

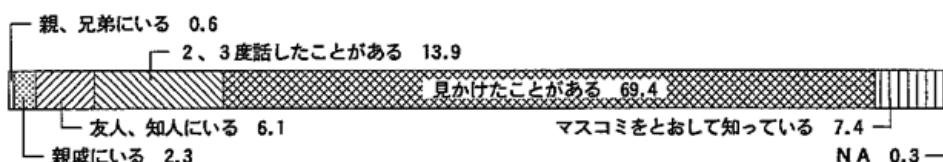


図1 接触の度合

### 2. 視覚障害者に対して抱いている社会的距离

図2は視覚障害者との関わりを、どの程度受け入れられるかを表している。

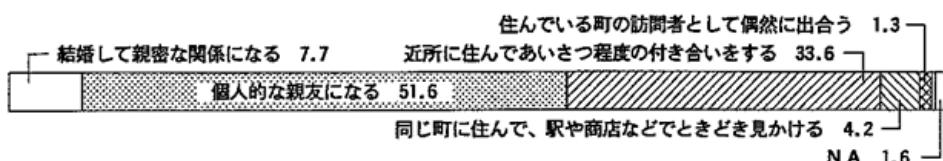


図2 社会的距离

51.6%の人が個人的な親友になることを認めている。次いで33.6%の人が近所に住むことを認めている。参考程度に似たような視覚障害者との社会的距離を示すデーターをあげておく。サンプル数が46と非常に少ないが、55%の人が「ごく近所に住む人として受け入れる」であり、「個人的な友人となる」ことを認めた人は39%となっていた（徳田、1989）。

### 3. 視覚障害者の能力に対するイメージ

図3-1～図3-6は視覚障害者の能力に対するイメージを表している。イメージは、客観的にみて適切と思われる認識がなされている項目とそうでない項目にばらつきがあった。

まず、保有感覚に対するイメージは、聴覚では84.3%、触覚では79.0%の人気が優れていると思っている。一般的に視覚障害者の聴覚や触覚は正眼者のそれらと変わるものではないと言われている。しかし、これらに関連する感受性に

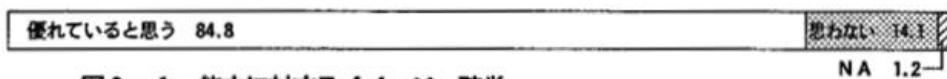


図3-1 能力に対するイメージ 聴覚

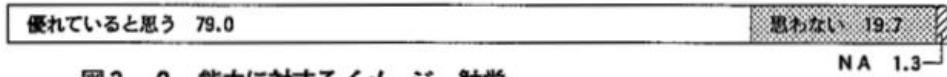


図3-2 能力に対するイメージ 触覚

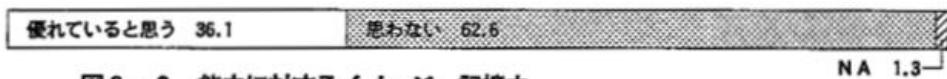


図3-3 能力に対するイメージ 記憶力

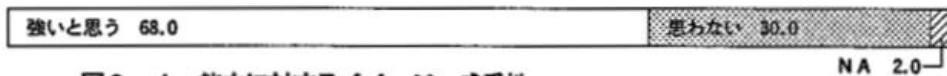


図3-4 能力に対するイメージ 感受性

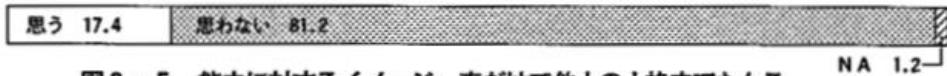


図3-5 能力に対するイメージ 声だけで他人の人格までわかる



図3-6 能力に対するイメージ 点字

ついても68.1%の人が優れていると思っており、多少誤った理解が浸透しているようである。

これに比べて記憶力に関しては62.6%の人は、特に優れているとは思っていない。また視覚障害者であっても点字が読めない人はいると、適切に考へている人は74.8%である。声だけで人格までわかると思っている人は、17.4%と少數であった。これらの項目に関しては比較的適切な認識がなされているといえるが、少數であっても正しい信じている人がいることも忘れてはならない。

スコット（1992）は一般の人々が盲人に対して抱くステレオタイプ的な信じ込みが、盲人たちとのつきあいの中に持ち込まれることを指摘している。能力に対する過大評価は、視覚障害者が援助を求めるときに疎外要因になると考えられる。

#### 4. 視覚障害者的人格に対するイメージ

図4-1～図4-4は視覚障害者的人格に関するイメージを表している。人格についてのイメージは、能力に関するイメージよりも項目によってのはらつきが少なく、どの質問に関しても9割以上の人人が適切な認識をしていた。これは具体的な体験をもとにしているというよりも、人格というのは個別的なものであり、視覚障害者という言葉でくくれるものではないという理性的な判断によるものではないかと推察される。

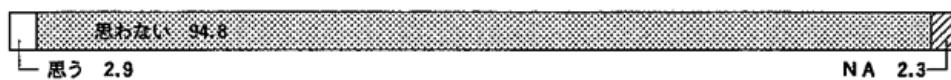


図4-1 人格に対するイメージ 境遇に甘えている

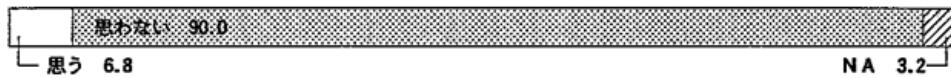


図4-2 人格に対するイメージ 援助を受けて当然だと思っている

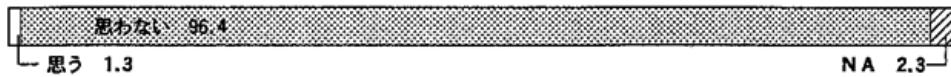


図4-3 人格に対するイメージ 相手のことを考えずにしゃべる



図4-4 人格に対するイメージ 愛想がわるい

### 5. 視覚障害者の歩行に関するイメージ

図5は視覚障害者の歩行に関するイメージを表している。63.6%の人が正しい訓練を受けた人で歩けると比較的正しい認識をしている。また23.5%の人は盲導犬を持てば歩けると思っている。約10%の人は視覚障害者の歩行に対して否定的な認識をしている。ただし、歩行という言葉を回答者がどのようにイメージしているかは、この質問からだけでは不明である。

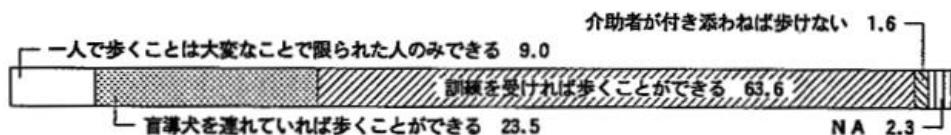


図5 歩行に関するイメージ

### 6. 補助具などに関する知名度

図6-1～図6-6は主な補助具をどの程度知っているかを表している。6

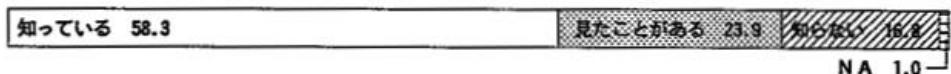


図6-1 知名度 白杖



図6-2 知名度 盲導犬

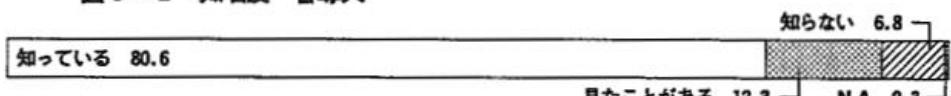


図6-3 知名度 音声信号



図6-4 知名度 点字ブロック

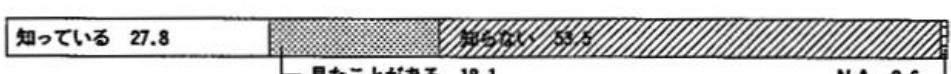


図6-5 知名度 点字を使った地図



図6-6 知名度 ガイドヘルパー

項目の中で知名度がいちばん高かったのは盲導犬で、99.4%の人がその存在を知っていた。点字ブロックは96.5%、音声信号は92.9%とこれも高い知名度であった。

白杖に関しては82.3%がその存在を知っているが、先にあげた物に比べて見たこと、聞いたことはあると答えた人の割合が多い。また、実際は盲導犬で歩く視覚障害者よりも白杖で歩く人の方が多いと思われるが、盲導犬に比べると白杖の存在はまだまだ知られていない。

点字を使った地図は約5割、ガイドヘルパーは約3割強の人が知っているにとどまっている。

### 7. 点字ブロックに関する理解度

図7-1～図7-6は点字ブロックに関する理解度を表している。点字ブロックは、一般的には利用価値が高いものと考えられている。しかし、触覚の問題で発見しにくかったり、他のものと点字ブロックを間違えたりする問題点があ

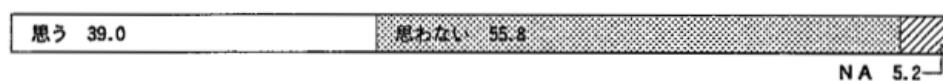


図7-1 点字ブロックの理解度 必ず上を歩く



図7-2 点字ブロックの理解度 どこにあるかよく知っている

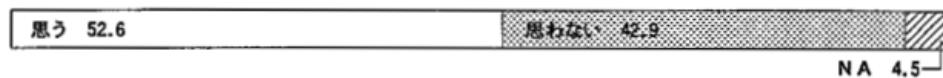


図7-3 点字ブロックの理解度 基準は共通している



図7-4 点字ブロックの理解度 安全に歩くことができる

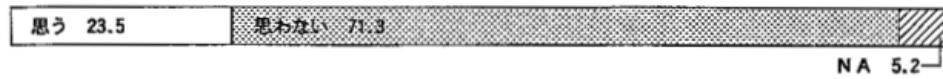


図7-5 点字ブロックの理解度 点字ブロックのある場所を教えてあげればよい



図7-6 点字ブロックの理解度 景観に合わせるのがよい

るといわれている。また、敷設の状況もまちまちであったり、敷設物がどのような形で敷設されているかをPRしないため、視覚障害者がその存在を知らない点字ブロックもあると考えられる（芝田、1991）。このような状況を考えたとき、39.0%の人が点字ブロックの上を歩くと思っていたり、31.6%の人が点字ブロックの敷設状況はよく知られていると思っていること、そして、52.5%の人が点字ブロックの敷設の基準は全国で共通していると思っていることは、実態と異なることになり、注目に値する。

次に、20.6%の人は点字ブロックがあると安全に歩けると思っている。点字ブロックは歩行の一助にしかならないことを考えると、点字ブロックを万能と思い込むことは危険である。道を聞かれた時に点字ブロックの位置さえ教えればよいと思っている人は23.5%である。これらの結果からは、点字ブロックを万能と思っている人は意外に少ないと思われる。

最後に、現在問題になっている点字ブロックと景観の問題は、89.4%の人は目立たなくすることに反対している。これは景観よりも機能面に注目している人が多いことのあらわれであろう。

表1～表6は点字ブロックを知っているかの問いと、点字ブロックに関する具体的な問い合わせクロスして集計したものである。

まず、表1は点字ブロックを知っているかという問いと、点字ブロックがあれば必ずその上を歩くという問い合わせクロス集計したものである。点字ブロックを知っている人（以下知っている人と略す）の40.6%、点字ブロックを見たことがある（多少知っている）人（以下見たことがある人と略す）の39.6%が、

表1 点字ブロックを知っているか×点字ブロックがあれば必ずその上を歩く

その上を歩く 知っているか	点字ブロックがあれ ば必ずその上を歩く と思う	点字ブロックがあれ ば必ずその上を歩く とは思わない	N A	計
点字ブロックを 知っている	40.6%	57.8%	1.6%	100%
点字ブロックを 見たことがある	39.6%	58.1%	2.3%	100%
N A	25%	0%	75%	100%

点字ブロックがあれば必ずその上を歩くと思っていて、両者の間に顕著な差はなかった。

次に、表2は点字ブロックを知っているかという問いと、点字ブロックがどこにあるか視覚障害者は良く知っているという問いをクロスして集計したものである。知っている人の31.6%、見たことがある人の39.5%が良く知っていると思っていた。両者の間には多少差が見られる。

表2 点字ブロックを知っているか×点字ブロックがどこにあるか良く知っている

どこにあるか 知っているか 知っているか	視覚障害者は点字ブロックがどこにあるかよく知っていると思う	視覚障害者は点字ブロックがどこにあるかよく知っていると思わない	N A	計
点字ブロックを知っている	31.6%	67.2%	1.2%	100%
点字ブロックを見たことがある	39.5%	60.5%	0%	100%
N A	0%	25%	75%	100%

次に、表3は点字ブロックを知っているかという問いと、点字ブロックをつける基準は全国で共通しているという問いをクロスして集計したものである。知っている人の57.8%、見たことがある人の46.5%が基準が統一されていると思っており、両者の間に多少差が見られた。点字ブロックの設置基準についてはまだ完全に統一されていないのが現状である。知っていると思っている人に誤解している人が多い。

表3 点字ブロックを知っているか×点字ブロックをつける基準は全国で共通している

基準は統一している 知っているか	点字ブロックをつける基準は全国で共通していると思う	点字ブロックをつける基準は全国で共通していると思わない	N A	計
点字ブロックを知っている	57.8%	41.0%	1.2%	100%
点字ブロックを見たことがある	46.5%	53.5%	0%	100%
N A	0%	25%	75%	100%

次に、表4は点字ブロックを知っているかという問いと、点字ブロックがあると視覚障害者は安全に歩くことができるという問いをクロスして集計したものである。知っている人の21.1%、見たことがある人の20.9%が安全に歩けると思っている。両者の間には差は見られなかった。

表4 点字ブロックを知っているか×点字ブロックがあると安全に歩ける

安全に歩ける 知っている	点字ブロックがある と安全に歩けると思 う	点字ブロックがある と安全に歩けると思 わない	N A	計
点字ブロックを 知っている	21.1%	77.7%	1.2%	100%
点字ブロックを 見たことがある	20.9%	74.4%	4.7%	100%
N A	0%	25%	75%	100%

次に、表5は点字ブロックを知っているかという問いと、視覚障害者に道を尋ねられたら、点字ブロックのある場所を教えてあげれば良いという問いをクロスして集計したものである。知っている人の24.2%、見たことがある人の18.6%が教えてあげれば良いと考えている。両者の間には多少差が見られた。知っていると思っている人のほうが、道を尋ねられた場合、点字ブロックを教えてあげれば良いと思っている人が多いことは注目に値する。

最後に、表6は点字ブロックを知っているかという問いと、点字ブロックは景観にあわせて目立たなくするのが良いという問いをクロスして集計したもの

表5 点字ブロックを知っているか×道をたずねられたら点字ブロックの場所を教えてあげればよい

場所を教えて あげれば よい 知っているか	道をたずねられたら 点字ブロックの場所 を教えてあげればよ いと思う	道をたずねられたら 点字ブロックの場所 を教えてあげればよ いと思わない	N A	計
点字ブロックを 知っている	24.2%	74.2%	1.6%	100%
点字ブロックを 見たことがある	18.6%	81.4%	0%	100%
N A	0%	25%	75%	100%

である。知っている人の5.9%、見たことがある人の7.0%が目立たなくするのが良いと考えていた。両者の間に差は見られなかった。

表6 点字ブロックを知っているか×点字ブロックは景観に合わせて目立たなくするのがよい

景観にあわせる 知っているか	点字ブロックは景観 にあわせてめだたなく するのが良いと思う	点字ブロックは景観 にあわせてめだたなく のがいいと思 わない	N A	計
点字ブロックを 知っている	5.9%	93.8%	0.3%	100%
点字ブロックを 見たことがある	7.0%	93.0%	0%	100%
N A	0%	25%	75%	100%

以上の結果より、点字ブロックを良く知っていると答えた人の集団と、見たことがあると答えた人の集団で、知っていると自己評価している人の方が誤解していると思われる項目が二つ認められた。しかし、点字ブロックに対する理解度には大きな差は認められなかった。このことから、点字ブロックの理解度は人によってまちまちであり、視覚障害者が点字ブロックを利用して歩くということは、まだまだ正確に伝わっていないのではないかと思われる。

#### 8. 視覚障害者の援助ニーズに関する理解

図8-1は視覚障害者に対して、一人で電車に乗るときに困ると思われていることを表わしている。電車の乗降が29.6%と一番多く、次いで乗りたいホームを見つけること19.4%、さらにホーム上の移動17.4%となっている。



図8-1 援助ニーズの理解

図8-2は国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所がH3年に出した「視覚障害者の社会適応に関する研究の報告書」(田内ら、1991)より駅、列車利用時に視覚障害者が困難を覚える点をまとめたものである。項目のとりかたに多少の違いはあるが、視覚障害者自身は回答の多かった順に①乗車券の購入、②ホーム上の移動、③ホームへの移動に困難を感じている。これを今回の結果と照らしあわせると両者の結果に多少のずれがあることがわかる。しかし、転落事故のように命に関わる事故との関連性を考えると、学生の理解には妥当性があると思われる。

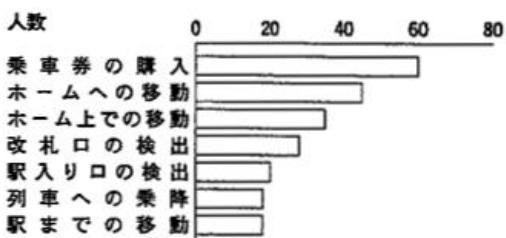


図8-2 駅、列車の利用時に視覚障害者が困難を覚える点

#### 9. 視覚障害者との交流に関する意識

図9は一人で歩いている視覚障害者を見かけたらどうするかを表している。助ける必要があるのか迷う人が27.7%、次いで、むこうから声をかけられれば助ける人が22.5%、また、助けようと思うが声をかけにくい人が20.9%となっている。これらをあわせて91.9%の人はなんらかの関心を持っていると考えられる。視覚障害者側からのアプローチ次第で援助が期待できる。声をかける必要はない、関わりたくないという人は6.2%とごく少数であった。

また、表7は視覚障害者が歩くことに対するイメージの問いと、視覚障害者が一人で歩いていたら助けるかをクロスして集計したものである。まず、視覚障害者が一人で歩くことは大変なことで、そのような事ができるのは限られた能力の人だけであると思っている人は、助けようと思うがどの様にしたら良い

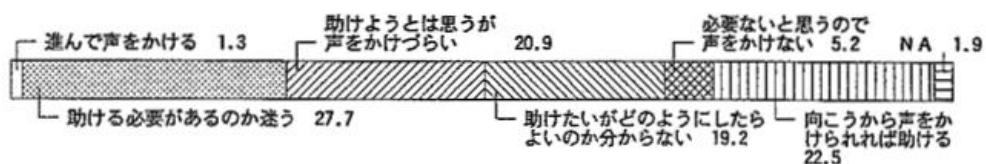


図9 交流の意識

のかが分からないので声をかけない33.3%、助ける必要があるのか迷う25.9%と続いている。

次に、視覚障害者は一人では歩けないが盲導犬を連れていれば歩けると答えた人は、助ける必要があるのか迷う28.4%、助けようと思うがなんとなく声をかけにくい、助けようと思うがどの様にしたら良いのかが分からないので声をかけない、が共に23.0%と続いている。この集団には、助ける必要がないと思っている人が4.0%いる。

それから、たいていの視覚障害者は正しい訓練を受ければ一人で歩くことができると思っている人は、助ける必要があるのか迷う28.9%、向こうから声をかけられれば助ける24.4%と続いている。また、この集団にも、助ける必要がないと思っている人が6.6%いる。

最後に、視覚障害者は、目の見える介助者が付き添わなければ歩けないと思っている人の集団には顕著な特徴はなかった。

これらの結果より、盲導犬を連れている場合や訓練を受けて歩いていると思われる視覚障害者に対しては、助ける必要があるのかと疑問に思う傾向が出て

表7 歩行に関するイメージ×一人で歩いている視覚障害者を助けるか

歩行 イメージ	助けるか	進んで声を 掛ける	助けること が必要な か迷う	助けようと 思うがなん となく声 をかけにく い	助けたいと 思うがどの ようになら よいのか 分からな い	一人で歩い ているのだ から声をか ける必要は ない	むこうから 声をかけら れれば助け る	あまり関わ りたくない	N	A	計
一人で歩くこ とは大変なこ とで限られた 人にしかでき ないと思う	3.7%	25.9%	18.4%	33.3%	0%	14.8%	0%	3.7%	3.7%	0%	100%
一人では歩け ないが盲導犬 を連れていれ ば歩くことが できる	0%	28.4%	23.0%	23.0%	4.0%	20.3%	1.3%	0%	0%	0%	100%
正しく訓練を 受けければ歩く ことができる	1.5%	28.9%	19.8%	16.8%	6.6%	24.4%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	100%
介助者が助け なければ歩く ことはできな い	20.0%	20.0%	20.0%	20.0%	0%	20.0%	0%	0%	0%	0%	100%
N A	0%	28.5%	28.5%	0%	0%	0%	0%	43.0%	43.0%	0%	100%

いると思われる。一般の人に援助を期待する場合、視覚障害者に対する手引きの仕方を広めるだけでなく、視覚障害者が白杖や盲導犬を使って歩く時の限界や危険なことをしっかりと伝える必要があると思われる。

#### 10. 歩行環境に対する考え方

図10は視覚障害者が安心して歩くために必要と考えられていることを表している。点字ブロックの上に物を置かないなど道路環境に注目した人が22.1%、点字ブロック、音声信号の整備に注目した人が17.6%であり、両者あわせて4割弱の人は物理的な環境整備に目を向けていた。

次いで、一般の人が声をかけるという人的環境に注目した人は25.4%であった。これは各項目を単独で考えたときには、一番多い回答が寄せられていた項目となる。視覚障害者の歩行能力の向上に注目した人の中で、20.2%は盲導犬の数を増やすことに注目していた。歩行訓練の内容がどこまで理解されての回答かわからないが、歩行訓練に注目したものは9.7%と少ない。

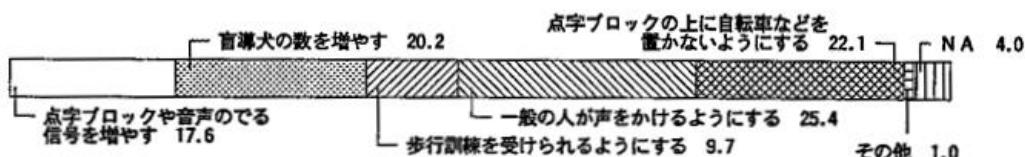


図10 歩行環境に対する意識

また、表8は視覚障害者が歩くことに対するイメージの問いと、視覚障害者が安心して歩くためになにが必要だと思うかの問いをクロスさせて集計したものである。視覚障害者が一人で歩くことは大変なことで、そのような事ができるのは限られた能力の人だけであると思っている人は、一般の人が理解して声をかける25.0%、盲導犬の数を増やす21.7%と統いている。

次に、視覚障害者は一人では歩けないが盲導犬を連れていれば歩けると答えた人は、一般の人が理解して声をかける25.8%、盲導犬の数を増やす25.7%と統いている。それから、たいていの視覚障害者は正しい訓練を受ければ一人で歩くことができると思っている人は、一般の人が理解して声をかける25.7%、点字ブロックの上に物を置かない22.3%と統いている。

表8 歩行に対するイメージ×視覚障害者が安心して歩くために何が必要だと思うか

何が必要か 歩行イメージ	一人で歩くのは大変なことで限られた人にしかできないと思う	一人では歩けないが盲導犬を連れていれば歩くことができる	正しい訓練を受けければ歩くことができる	介助者なしでは歩けない	N A
点字ブロックなどを整備する	10.1%	21.1%	17.7%	10.0%	21.4%
盲導犬を増やす	10.3%	27.7%	18.5%	10.0%	21.4%
視覚障害者自身が訓練受けられるようにする	6.9%	13.7%	11.0%	10.0%	7.2%
一般の人が理解して声をかけるようになる	9.4%	22.0%	25.7%	40.0%	14.3%
点字ブロックの上に物を置かないようする	9.6%	21.5%	22.3%	30.0%	7.2%
その他	14.3%	28.6%	1.0%	0%	0%
N A	11.5%	15.4%	3.8%	0%	28.5%
計	100%	100%	100%	100%	100%

最後に、視覚障害者は目の見える介助者が付き添わなければ歩けないとと思っている人は、一般の人が理解して声をかける40.0%、点字ブロックの上に物を置かない30.0%と続いている。

これらの結果から、それぞれの歩行のイメージと視覚障害者が安全に歩くためには何が必要かにおいて、多少の違いはあっても似たような解答の傾向を表している。正しい訓練を受けければ一人で歩くことができると思っている人で、実際に視覚障害者自身が歩行の訓練を受けられるようにすることと答えた人は11.0%であった。このポイントは、盲導犬の数を増やす18.5%よりも低い。このことは、視覚障害者の白杖歩行訓練、または盲導犬歩行訓練の実態が正しく認識されておらず、訓練士の数の不足や訓練所の所在地の偏りなどから、視覚障害者の中に訓練を受けたくても受ける機会が得にくい実態なども一般の人伝えていく必要性を表していると思われる。

### 11. 視覚障害者に対する興味の度合い

図11は視覚障害者との接し方を知る機会があれば参加するかを表している。新聞やニュースで取り上げられていれば注意してみるが41.5%、次いで、駅などでポスターが貼ってあれば見るが31.8%となっており、両者あわせて73.3%の人が受け身的な興味を示している。この中で講習会などがあれば参加するが6.1%、本などを購入して読んでみるが3.5%、両者あわせて9.6%の人は積極的な興味を示していることも見逃せない。

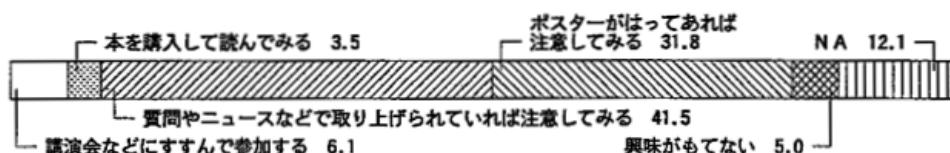


図11 興味の度合い

### III. まとめ

今回の調査で一般の人々の視覚障害者の歩行に対する大まかな傾向は次の通りである。

- ①視覚障害者に対する理性的な理解は浸透しつつある
- ②理解を支えているのは視覚障害者との具体的な体験を通してではなく、マスコミなどによる間接的接触を通したものである
- ③視覚障害者の能力に対する誤解がある
- ④点字ブロックに関しては、人によって理解していると思う基準がまちまちで、誤解されている部分がある
- ⑤物理的環境整備が視覚障害者の歩行を考えるうえで重要だ、と思っている人は4割近くいる
- ⑥白杖歩行の知名度は低く、白杖歩行訓練の実体を知る人は少ない
- ⑦視覚障害者に興味を持っている人は多いが、いざ目の前にすると傍観者の立場を取る人が多い

徳田（1989）は視覚障害者に対する社会の人々の態度改善の方法を6つ紹介し、その中でテレビなどの映像による方法と読書による方法を間接的な接触と

し、その問題点としてこれらの方が、視覚障害者の特殊能力に対して誤った理解をする傾向があることを指摘している。物理的な歩行環境も一般の人々にとっては広い意味で視覚障害者との間接的な接触と考えられる。

今回の調査でも先にあげたように視覚障害者の一部の能力に対する過大評価や点字ブロックの理解にこの傾向はみられた。正しい説明もなく、環境整備だけが一人歩きすれば、一般の人々に誤解を与えることも十分に考えられる。環境を整備する場合、基準を持つことはいまでもないが、標準的な利用の仕方と、例外や限界のある事をPRするべきであろう。また、一般の人々に誤解がないように視覚障害者が歩行するのが困難な場所に、なにを手伝ってほしいか明確にわかるポスターなどを掲示することも効果的であると思われる。

また、視覚障害者の歩行補助具としての白杖の知名度は低く、盲導犬の知名度をかなり下回っていた。これは、マスコミが視覚障害者の歩行を取り上げる場合、白杖による歩行よりも盲導犬による歩行の方が頻度が高いためと思われる。

一般の人々は、歩行訓練を受けた視覚障害者が歩行をしていたり、盲導犬を連れていたら、助ける必要性を疑問に思う傾向が見られた。実際に、視覚障害者が白杖や盲導犬を使って歩くということに関しての回答者の認識は、数字で示される以上に低いものとなっていると思われる。マスコミが視覚障害者の歩行を取り上げるとき、点字ブロックの上の自転車の撤去のみをクローズアップするような、一面的な取り上げ方をする場合が多い。間接的な接触による啓発法には、取り上げられる頻度や、重点の起き方が事柄の重要性の印象づけに大きく関係するという問題点があげられるのではないだろうか。

現在の視覚障害者をとりまく歩行環境は、物理的にも人的にも好転しつつあるが、まだまだ真の意味で視覚障害者が歩くということが理解されているとはいえない。視覚障害者が歩けば次々に声がかかるという社会ではなく、自ら積極的に援助を依頼する能力を身につけることが重要になっていると思われた。援助依頼の技術の1つであるハインズブレイクについては、社会的啓発の意味があると言われている（芝田、1992）。徳田（1989）は先にあげた6つの方法の中でさらに手引き体験を持つ方法に対しては、交流の場での当惑に対して最

も大きな態度の改善のことと、この方法は視覚障害者の特殊能力に関しては、経験前と後で変化がないということを指摘している。

マスコミなどによる啓発法に比べて、視覚障害者自身が歩き、援助依頼をすることで行う啓発は規模的には小さい。だが、その効果は確実に自らの歩行環境を変えていくものであろう。

#### IV. おわりに

今回は調査の対象が学生に限られていて、他の属性を持つ人々との比較ができるないことが残念であった。また、質問項目が絞り切れず、一般の人が視覚障害者の歩行をどの様に理解しているか深く分析できなかった。機会があれば同じような調査を実施し、より深く一般の人々の視覚障害者の歩行に関する認識を分析したいと思う。

最後になったが、今回のアンケート調査をするにあたって、快く協力してくださいました関西学院大学の松中先生と大阪府立大学の定藤先生に感謝申し上げる。

### 学生の視覚障害者の歩行に関するイメージの調査

#### 記入の方法

- ・この質問用紙を受け取られましたらあなたの意見や様子について率直にお答え下さい。
- ・記入は原則として回答項目の番号に○印をつけて下さい。
- なお、この質問用紙では視覚障害者誘導用ブロックを点字ブロックと表現しています。

1. あなた自身のことについてお聞きします

- |                                |           |
|--------------------------------|-----------|
| ・年齢 ( ) 才                      | ・性別 ①男 ②女 |
| ・学部 ①工 ②農 ③経済 ④総合 ⑤社会 ⑥その他 ( ) |           |

2. あなたは視覚障害者をどの程度知っていますか？

- ①親、兄弟に視覚障害者がいる
- ②親戚に視覚障害者がいる
- ③友人、知人に視覚障害者がいる
- ④視覚障害者と2, 3度話したことがある
- ⑤視覚障害者を見かけたことはあるが話したことではない
- ⑥視覚障害者を見たことはないが書物、新聞、テレビなどマスコミを通して知っている

3. あなたは視覚障害者とどの程度の関わりなら受け入れますか？受け入れられるもの全てに○印をつけてください。

- ①結婚して親密な関係になる
- ②個人的な親友になる
- ③近隣に住んで、あいさつ程度のつき合いをする
- ④同じ街に住んで、駅や店で時々見かける
- ⑤住んでいる街の訪問者として偶然に会う

4. あなたは視覚障害者が持っている能力についてどの様なイメージを持っていますか？

(①、②のどちらかに○印をしてください)

- |                        |           |
|------------------------|-----------|
| ・視覚障害者は、聴覚が優れている       | ①思う ②思わない |
| ・視覚障害者は、触覚が優れている       | ①思う ②思わない |
| ・視覚障害者は、記憶力が優れている      | ①思う ②思わない |
| ・視覚障害者は、感受性が鋭い         | ①思う ②思わない |
| ・視覚障害者は、声だけで他人の人格までわかる | ①思う ②思わない |
| ・視覚障害者は、みな点字が読める       | ①思う ②思わない |

5. あなたは視覚障害者的人格についてどの様なイメージを持っていますか？

- ・視覚障害者は、自分の境遇に甘えている ①思う ②思わない
- ・視覚障害者は、手伝って貰うことを当然と思っている ①思う ②思わない
- ・視覚障害者は、相手のことを考えずにしゃべる ①思う ②思わない
- ・視覚障害者は、愛想がわるい ①思う ②思わない

6. あなたは『視覚障害者が歩く』と聞いて、どのようなイメージを持たれますか？

- ①視覚障害者が一人で歩くことは大変なことで、その様なことができるのは限られた能力のある人だけである
- ②視覚障害者は一人では歩けないが、盲導犬を連れれば歩くことができる
- ③たいていの視覚障害者は正しい訓練を受ければ、ひとりで歩くことができると思う
- ④視覚障害者は、目の見える介助者がつきそわなければ歩けない

7. あなたは次にあげるものを知っていますか？一番近いものに○印をしてください。

- ・白い杖 ①知っている ②見たこと(聞いたこと)がある ③知らない
- ・盲導犬 ①知っている ②見たこと(聞いたこと)がある ③知らない
- ・音声の出る信号機 ①知っている ②見たこと(聞いたこと)がある ③知らない
- ・点字ブロック ①知っている ②見たこと(聞いたこと)がある ③知らない
- ・点字を使った地図 ①知っている ②見たこと(聞いたこと)がある ③知らない
- ・ガイドヘルパー ①知っている ②見たこと(聞いたこと)がある ③知らない

8. 質問7で点字ブロックについて①または②と答えた方にお聞きします。

- ・視覚障害者は、点字ブロックがあれば必ずその上を歩く
  - ①思う ②思わない
- ・点字ブロックがどこにあるか視覚障害者は良く知っている
  - ①思う ②思わない
- ・点字ブロックをつける基準は全国で共通している
  - ①思う ②思わない
- ・点字ブロックがあると、視覚障害者は安全に歩くことができる
  - ①思う ②思わない
- ・視覚障害者に道をたずねられたら、点字ブロックのある場所を教えてあげればよい
  - ①思う ②思わない
- ・点字ブロックは、景観を考えて道路の色などにあわせて目立たなくするのがよい
  - ①思う ②思わない

9. あなたは、視覚障害者がひとりで電車に乗るときに何がいちばん困る（危険）と思いませんか？（2つ選んで○印をつけてください）

- ①乗車券の購入
- ②改札口の発見
- ③階段の昇降
- ④ホーム上での移動
- ⑤電車の乗降
- ⑥乗りたい電車の着くホームを見つけること

10. あなたは駅などでひとりで歩いている視覚障害者を見かけたらどうしますか？

- ①すすんで声をかける
- ②助けることが必要なのか迷う
- ③助けようとは思うがなんとなく声をかけにくい
- ④助けたいと思うが、どの様にしたらいいのかわからないので声をかけない
- ⑤ひとりで歩いているのだから助ける必要はないと思うので声はかけない
- ⑥むこうから声をかけられれば助ける
- ⑦あまり関わりたくない

11. あなたは視覚障害者が安心して歩くためには、何が必要だと思いますか？（あてはまるもの2つに○印をつけてください）

- ①点字ブロックや音声のできる信号機を整備する
- ②盲導犬の数を増やす
- ③視覚障害者自身が、歩行の訓練を受けられるようにする
- ④視覚障害者のことを一般の人が理解して声をかけるようにすること
- ⑤点字ブロックの上に自転車などを置かないようにすること
- ⑥その他 具体的に

( )

12. あなたは、視覚障害者との接し方を知る機会があれば参加しますか？（あてはまるもの2つに○印をつけてください）

- ①講習会などあれば進んで参加する
- ②本屋で視覚障害者関係の本を見掛けたら購入して読んでみる
- ③新聞やニュースなどで取り上げられていれば注意してみる
- ④駅などでポスターが貼ってあれば注意してみる
- ⑤全く興味が持てない

ありがとうございました。

### 引用・参考文献

- 河内清彦 1990 学生および教師の視覚障害者観. 文化書房博文社
- 小島容子 1978 社会リハビリテーション. 誠信書房
- 芝田裕一 1986 視覚障害者タイルの問題点と指導. 視覚障害研究, 26, 54—63
- 芝田裕一 1991 視覚障害者の歩行環境. 視覚障害研究, 33, 25—33
- 芝田裕一 1992 視覚障害者の歩行における援助依頼. 視覚障害研究, 36, 69—75
- 田内雅規他 1990 視覚障害者の社会適応に関する研究 列車乗降時の安全確保について. 国立リハビリテーションセンター研究所
- 田内雅規他 1991 視覚障害者の社会適応に関する研究 列車乗降時の安全確保について平成3年度報告書. 国立リハビリテーションセンター研究所
- 田中農夫男・佐藤平・藤田稔 1986 視覚障害児の屋外歩行に関する調査. 視覚障害研究, 23, 54—63
- 徳田克己 1989 社会の人々の態度を改善するための試み. 視覚障害, 99, 5—24
- 水谷昌史 1988 白杖が感じた社会の素顔. 視覚障害研究, 28, 4—11
- ロバート・A・スコット 1992 盲人はつくられる. 東信社